

中山きくさん

1928(昭和3)年11月10日生まれ

沖縄県佐敷村(現南城市)

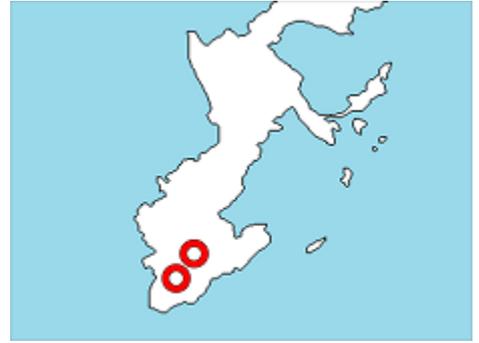
所属 白梅学徒隊

(県立第二高等女学校)

第24師団第1野戦病院

戦地 富盛(現八重瀬町)

～真壁(現糸満市)～知念方面



●1945(昭和20)年3月6日 第24師団第1野戦病院入隊

父が兵隊に行っていないのが悔しかったので、女の人でもお国のために働けると、喜んで入隊。

「動員」ではないのかと言われますが、あれは「入隊」でした。「看護教育隊」と言われてましてね。白梅と積徳と一緒に。厳しかったですよ。朝から軍隊のラッパで動きます。夜中にも集合があって、服装の点検して、乱れていると怒られ。軍曹に食事を持っていくのが遅れるとビンタ。「初年兵だと思え」と。本当の軍隊でしたね。

2つの魔法の言葉「お国のために」「ほしがりません勝つまでは」。2つの言葉に縛られていました。これで、訓練もその後も何でもできていたんだと思います。

一生懸命勉強していたんですが、18日間で看護教育は打ち切られました。艦砲で。10・10空襲と同じように、いきなり撃ち込まれて。

●1945(昭和20)年3月23日 (現八重瀬町)富盛の野戦病院壕へ

軍医1人に衛生兵、看護婦。その人たちが傷の手当をする。私たちは、食事の世話、排せつの世話。ほとんど汚物のことです。看護婦の人がガーゼを持ってきて、空き缶使ってこうやって・・・と説明しました。それでも手が回らなくて垂れ流し。においもすごい。2ヶ月も着たきりすずめだから、シラミがびっしり。

八重瀬岳に本部の壕があって、私は手術場に行かされました。手術場には寝台が1つだけあって、照明は空きビンに灯油を入れて火をともしていました。手術となると、ろうそくを持って立つんです。私が2本持つ、もう一人仲間が2本持つ。手術場では、横になったことがなかったですから、壁にもたれて眠るくらいで。疲労困憊ですよ。それを軍医も知ってるんですが、眠くなるので、革靴で脛を蹴飛ばされる、目を覚ます、また眠くなる、また蹴飛ばす。革靴といっても、木とか鉄みたいな固い靴です。それで蹴飛ばす。

足の切断をするときは、はじめのうちは一応麻酔をしていました。それでも、量も時間も足りなかったんじゃないでしょうか、たいていの兵隊が悲鳴を上げました。私たちもはじめは泣いてましたけどね。

開南の学徒隊(鉄血勤皇隊)の人がケガをして来たんですが、軍医が入れてくれない。同じ学生、この人をなんとかしたくて、学徒隊だけで治療の真似事をしました。腕が皮だけでつながっている状態で。まねごと、気休めです。この人は、私たちが出た後も残ってましたから、たぶん亡くなったと思います。

私たち第二高女は56人いて、1週間目で10人が帰されて、6月4日までは、この46人が1人も欠けていません。本当に注意深く動いていたんです。壕の外に出て見つかるとう機関銃の雨ですから。「飛行機が飛んでいるときは絶対この壕に入るな」と言われました。「お前たちが死んでも見つかるてはいかん」と。

●1945(昭和20)年6月4日 解散命令

本部壕に集合と言われて。新城分院もたたんできていました。友達がそこに行ったのも戻ったのも知らなかったです。新城分院では重症患者500人に毒を飲ませたと聞きました。

本部壕に集合させられて、このときはじめて「4月1日に米軍が上陸して～」と本当の情報がいったんです。「1週間もしたらここにも米軍がくる。ここまでよくやってくれたが、病院を閉める」と言われました。怒りましたよ。ここまで来てあとは自分たちで行動しろと言われて。最後まで軍と一緒に行動させてくれと言いましたが、聞き入れられない。出て行けと言われて。どうしようもないです。歩ける者は出せと言われました。残った人たちがどうなったかはわかりません。私たちはもう出てしまったので。

南に逃げなさいと言われても、南の方はよくわかりませんから途方にくれました。大勢の人が南に逃げている、お祭りのようでした。道には腐乱死体がいっぱい。夜に逃げていると知らずに触れたこともありました。

白梅の塔には16人が行って3人だけ生き残りました。私は白梅の塔の方にはいかなかったです。同じ村の千代ちゃんと真壁に行きました。それからあの村この村行ったり来たり。7月まで逃げ回っていました。全然知らない兵隊が捕虜になりなさいというので、諭されて出て行きました。

(取材日:2012年2月6日)